

本稿は2025年度の京都市立芸術大学美術学部研究紀要に出版予定の論文の著者版です。

## 依田照彦の短歌—ハンセン病療養所・長島愛生園の科学者・歌人

磯部洋明(京都市立芸術大学), 鈴木晴香(歌人)

### Abstract

YODA Teruhiko (1912-1971) was an active tanka poet at the Nagashima Aiseien, a Hansen's disease sanatorium in Japan. He was also the leader of the meteorological and astronomical observatory at the sanatorium. This paper describes Yoda's life and his tanka, as well as the meteorological and astronomical observatory at the sanatorium whose scientific activity was unique and extraordinary among the activities in Hansen's disease sanatoria.

### 1 はじめに

本稿は歌人・依田照彦（1912-1971）とその短歌についての小論である。青年期にハンセン病を発症した依田は、以後の生涯の大半をハンセン病療養所である岡山県の長島愛生園で過ごし、同園の入所者による「長島短歌会」のメンバーの一人として、また短歌結社誌「アララギ」の会員として、精力的に短歌を発表した。自然科学にも深い関心のあった依

田は同園に設置されていた気象観測所の中心人物として気象と天文の観測に携わっており、同園の医師と協力してハンセン病の症状の一つである神経痛と気象の関係に関する研究も行っている。園内の植物採集に凝っていた時期もあった。自然科学の徒としての依田の営為が彼の作歌にどのように現れているのかは本稿における主要な関心の一つである。

科学者であること以上に依田の人生と作歌に大きな影響を与えていたのは、依田がハンセン病者であったことである<sup>1</sup>。ハンセン病者の文学はそれ自身で一つのジャンルのようにみなされることもあり、皓星社から全十巻の全集が出ている<sup>2</sup>。短歌においては依田と同じ長島愛生園の入園者であった明石海人が最も良く知られている。「深海に生きる魚族のように、自らが燃えなければ何処にも光はない」と書かれた序文が有名な海人の歌集『白描』<sup>3</sup>は出版当時(1939年)のベストセラーとなっており、1936年に発表された北條民雄の小説「いのちの初夜」と並んでハンセン病文学の代表作と見なされている。依田の歌にもハンセン病者としての経験が多く詠まれており、その意味では彼もハンセン病文学者の一人と言えるだろう。ただし「ハンセン病文学」というカテゴリにいれることは、作者がハンセン病者であるという事実からその作品を切り離さないということであり、結果としてそれが作品の読み方を狭めてしまうという懸念は繰り返し指摘されている(Burns 2004; Tanaka 2015; 大野 2020)<sup>4</sup>。これは

<sup>1</sup> 蘭由岐子によれば、ハンセン病を患った者の経験は、医学的な疾患や治療する医師との関係で位置づけられる「患者」としてのみではなく、その病に付与された社会文化的な意味—その最も大きなものがスティグマである—によって、より包括的な「病者」としてのものになる(蘭 2004: 45)。本稿で「患者」または「元患者」ではなく「ハンセン病者」という言葉を用いているのはこの蘭の論に依っている。一方で「語り手が回復者を「病者」に閉じ

込めてしまっている」という指摘がなされていることも述べておきたい(鈴木陽子 2020)。

<sup>2</sup> 大岡信、大谷藤郎、加賀乙彦、鶴見俊介が編集を務め、2002年に皓星社から出版された全10巻の全集。

<sup>3</sup> 『白描』は村井紀編『明石海人歌集』(2012)に収録されている。

<sup>4</sup> 大野(2020)はロラン・バルトの「作者の死」に代表されるような作者と作品を切り離したテクスト中

作品の鑑賞のみにとどまる問題ではなく、一人の作家の作品群をハンセン病者によるものとしてのみ受容することは、その人の人生をハンセン病者としてのみ見ることでもあるだろう。だが、当然ながらハンセン病者であることだけがその人の人生ではない。そして近年のハンセン病についての社会学および歴史学的研究は、病と差別に苦しんだりそれと戦ったりするだけではない、ハンセン病者たちの多様な生の実践に目を向けてきた<sup>5</sup>。その視点を本稿も共有している。

ハンセン病文学が戦前から注目を集め現在でも研究が続いているのに対し、依田が短歌と並んで情熱を注いだ気象・天文観測のような自然科学的営為がハンセン病療養所内で行われていたことはほとんど知られていない。長島愛生園の気象観測所は、昭和12年頃から54年頃まで、40年以上にわたって国の気象観測網の一端を担う正式な観測所としての役割を果たし、その業績を度々表彰されるなど、外部社会から隔離されたハンセン病療養所内の患者作業としては特異な存在であった。また、気象観測所に附属する形で設置された天文台では昭和20年代から30年代にかけて定常的な太陽黒点の観測が行われていた。その一端は磯部(2019; 2022)で紹介されている。愛生園の気象・天文観測について、本稿では依田の短歌を理解するための背景としての概略の説明に留めるが、その詳細を記録することはハンセン病史のみならず科学史の観点からも重要な仕事であることは指摘しておきたい。

---

心主義的鑑賞をし難いという点で「癩文学」にはアウトサイダーアートには類似の構造があることを指摘している。北條民雄が自分の文学を「癩文学」と呼ばれることを嫌ったこともよく知られている。荒井裕樹によれば北條は自らの文学に「没個性的な患者生活からの自己の差異化」を求め、「文学を追求する困難な道のりに苦悩する」ことで作家としての自己同一性を確立しようとし、他の患者らが自らの慰みとして行うような「癩文学」とは距離を取った（荒井 2011: 115-117）。

<sup>5</sup> 社会学では蘭(2004)、坂田(2012)、桑畠(2013)、有蘭(2017)、鈴木(2020)、歴史学では廣川(2011)、Burns(2019)、松岡(2020)、文学ではBurns(2004)、Tanaka(2013)など。

本稿の残りの構成は以下である。まず依田の短歌を読むための背景として、2章では日本のハンセン病の歴史、3章ではハンセン病文学の歴史を先行研究に基づいて概観する。次に4章で依田が暮らした長島愛生園とその気象観測所および天文台について説明する。5章では依田の短歌をそのライフヒストリーが表れたものとして読み解き、6章で依田の人物像やその人生がハンセン病史やアマチュア科学史へもたらす視座について若干の考察を行う。1章から4章は磯部が執筆し、5章と6章は鈴木と磯部の共同執筆である。

なお本稿では長島愛生園の機関誌「愛生」からの引用が多数ある。同誌はアジア・太平洋戦争末期の1944年に一度休刊し、戦後に再開するときに巻号を一度リセットしていること、基本的に月刊で出版されていることから、愛生 1944.7 (1944年7月号) のように出版の年月で巻号を指定する<sup>6</sup>。

## 2. ハンセン病について

ハンセン病は、結核と同じ抗酸菌であるらい菌 (*Mycobacterium leprae*) を病原体とする感染症である。戦後に有効な治療薬が普及するまでは不治の病と考えられていたこと、病状が進むと身体や容貌の大きな変化を伴うことなどから、かつては最も恐れられていた病気の一つだった。また業病であるという考え方や遺伝病という誤解もあり、患者本人、そしてその家族までが厳しい差別を受けていた<sup>7</sup>。かつては「癩（らい）病」と呼ばれていたが、差別的に使われてきた歴史があるため現在ではハンセン病という病名が使われている<sup>8</sup>。日本では新規患者が

<sup>6</sup> 愛生誌は現在も発行されており、同園や国立ハンセン病資料館で閲覧できる他、一部を除いて国立国会図書館デジタルコレクションにも収録されている。

<sup>7</sup> ハンセン病へのステigmaを取り除くために「遺伝病だという誤解を解く」という啓発がなされてきたが、遺伝性の疾患だからといって差別が正当化されるわけではない（廣川 2023）。

<sup>8</sup> ハンセン病(Hansen disease または Hansen's disease)という名称は、1873年にらい菌を発見したノルウェーの医学者ゲルハール・ハンセン(Gerhard Hansen)に由来する。それ以前からこの病気を表す言葉（日本語では癩病に相当）する英語の言葉は旧約聖書に由来を持つleprosy（ラテン

出ることはほとんどなくなっているが (Koba et al. 2009)<sup>9</sup>、今も年間 1 万人以上の新規患者が発生している地域もある<sup>10</sup>。

古代から近代までの日本のハンセン病の通史がまとまった著作としては山本俊一(1993)や Susan L. Burns(2019) のものがあり、以下の記述は別途示したものとのぞいて山本 (1993) に依拠している<sup>11</sup>。ハンセン病は古代から存在していた病気であり、その起源は東アフリカか近東にあると考えられている (Monot et al. 2005)。日本にいつ頃入ってきたのかは定かではないが、古くは日本書紀にも記録がある。ただしこの時代の記録が本当に現在ハンセン病とされる病気であったのか症状の似た他の疾患だったのか判断は難しい。聖武天皇の皇后であった光明皇后がハンセン病患者を看護した伝説はよく知られており、このことは後になって貞明皇后（大正天皇の皇后）をはじめとする皇室がハンセン病政策に積極的に関与したことにつながっている。

奈良時代から平安時代にかけては、仏教がハンセン病患者の救済に大きな関心を持っていたが、中世になるとその活動は低調になる。その中で例外的なものが、ハンセン病患者を収容する施設（北山十八間戸）を奈良に設立した僧の忍性である<sup>12</sup>。1549 年にフランシスコ・ザビエルが来日してから徳川幕府が鎖国令を発する 1639 年までの間は、ローマ・カトリックの宣教師とその信者たちによる救済活動

語の lepra) である。ハンセン病患者を表す英語の leper は日本語の癪と同様に強い差別的・攻撃的なコノーテーションのため忌避されているが、病名の leprosy については現在も医学用語として使用されている。leprosy を Hansen('s) disease に置き換えるべきだという主張は国際的にもなされているが (Deps and Cruz 2020 など)、それに対しては、人名や地名などを病気の名前に使うべきでないという世界保健機構(WHO)の指針や、ハンセン自身が患者に対し非倫理的な医療行為を行っていたことから、変えるとすればハンセン病ではなく病因や病理に対応した名称にすべきという反論もなされている (Butlin et al. 2020)。本稿では引用部分や法律等の名称に現れる場合を除いて、病名としては「ハンセン病」を、文学のジャンルとしては「ハンセン病文学」を用いる。

<sup>9</sup> 最近の状況は国立健康危機管理研究機構の感染症情報提供サイトで確認できる。 <https://id->

が行われていた。人々の移動が厳しく制限されていた江戸時代には、ハンセン病者たちは生まれ故郷に居住を続けるか各地域で小規模な病者の集落を作って生活をしていたと考えられる。明治維新で移動が自由になると、故郷を離れて浮浪生活に入る患者が増え、特定の場所に集住するようになってきた。よく知られた集住地には熊本本妙寺、金比羅宮、浅草寺、草津温泉などがある。

明治時代にはハンセン病の専門病院や私立の療養所が各地に建設されているが、そこでは熊本の回春病院を設立したハンナ・リデルや草津の聖バルナバ医院を設立したコンウォール・リーなどの外国人宣教師が果たした役割も大きかった。日本国政府が本格的にハンセン病対策に乗り出すのは明治時代の後半のことだが、そこには、日露戦争に勝利して世界の「一流国」の仲間入りをした日本が、欧米ではほぼ根絶されていたハンセン病が蔓延し、物乞いなどにより生活する浮浪患者が日本を訪れる外国人の目に触れる状態にある状態を、国の恥辱として問題視したことが背景にある。1907 年には近代日本における最初のハンセン病に関する法律である「癞予防ニ闇スル件」が制定され、全国に 5ヶ所の公立療養所が設置された。この法律は自宅で療養するだけの資産等を持たない浮浪患者の収容を主眼としていた。しかし同法を改正して 1931 年に成立した「癞予防法」では、それまであった「療養ノ途ヲ有セヌ且 救護者ナキモノ」という隔離収容の条件が削除

[info.jihs.go.jp/diseases/ha/leprosy/030/general.htm](http://info.jihs.go.jp/diseases/ha/leprosy/030/general.htm)  
1 (最終アクセス 2025 年 11 月 12 日)

<sup>10</sup> WHO が公開しているデータでは、2024 年の (報告された) 新規患者数は国別で多い順にインド 100,957 人、ブラジル 22,129 人、インドネシア 14,698 人、バングラデシュ 3,519 人、コンゴ民主共和国 3,038 人となっている。

<https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/number-of-new-leprosy-cases>  
(最終アクセス 2025 年 11 月 12 日) .

<sup>11</sup> 山本俊一は歴史学者ではなく医師・衛生学者であり、同書には医学的な内容も比較的詳しく書かれている。

<sup>12</sup> 長島愛生園の事務官でハンセン病史家でもあった宮川量は、「我邦救癪史を通覧するに、特筆すべき三大事蹟あり。一に光明皇后の御事蹟,二に忍性律師の慈悲行爲、三に我が皇太后陛下の御事蹟である」と述べている（宮川 1936）。

され、法律上は全患者が隔離収容の対象となった。同時期には各県が競ってハンセン病患者を見つけだし、強制的に入所させるという「無らい県運動」が全国的に進められている。最初の国立療養所である長島愛生園が設立されたのは 1930 年であるが、それはこのように全ての患者を隔離収容しようとする政策が推し進められた時期であった。ただし療養所への入所者数が在宅患者数を上回ったのは 1940 年のことであり（松岡弘之 2020:）、大学病院への通院や療養所以外の患者部落での生活など、隔離政策下においても多様な生活・療養の形態があったことが指摘されている（廣川 2011）。また、植民地支配していた時代に朝鮮、台湾、満州にも療養所が建設されていた。植民地および太平洋諸島などアジア・太平洋戦争中の日本の占領地におけるハンセン病政策については「ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書」（以下「最終報告書」）の第十七章にまとめられている<sup>13</sup>。

隔離収容を進めるにおいては、療養所は患者が安心して療養を受けられる理想的な場であることが宣伝された。後述するようにそこにおいては小川正子のような医療者、また患者自らの手による文学作品もその一端を担っている。しかし療養所における生活は、明白かつ著しい人権の侵害を伴うものであった。療養所の入所者やその家族が受けて来た被害については、「最終報告書」およびその別冊の「ハンセン病問題に関する被害実態調査報告書」（以下「被害実態調査報告書」）に全 13ヶ所の国立療養所入所者、2ヶ所の私立療養所入所者、療養所退所者

<sup>13</sup> 2005 年に発行された財団法人日弁連法務研究財団・ハンセン病問題に関する検証会議による「ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書」のこと。日弁連法務研究財団の HP から DL できる。  
<https://www.jlf.or.jp/work/hansen/report/>

<sup>14</sup> 懲戒検束権の規定は大正 5 年に「癞予防ニ関スル件」に改正で追加され、「癞予防法」にも受け継がれた。昭和 28 年制定の「らい予防法」にも、所内の秩序を維持するために入所者に対し戒告を与え謹慎させることができる条文（第十六条 2）として残っている。

<sup>15</sup> 1948 年に制定された優生保護法においてハンセン病患者に対する優生手術の規定があるが、その前身である 1940 年に制定の国民優生法にはその規定はない。したがって 1948 年以前には法的根拠がない状態であったにもかかわらず、ハンセン病患者に

および患者家族に対する調査がまとめられている。隔離収容の根拠となった癞予防法には退所に関する規定はなく、外出はごく限られた場合に制限されており、所内には火葬場や納骨堂が併設されるなど、隔離されたまま生涯を送ることが前提となっていた。また多くの入所者が、手紙などのやり取りを介して病気が知られて家族・親族に迷惑がかからないように偽名（園名）を用いることを求められた（被害実態報告書: 45-50）。療養所長には懲戒検束権、すなわち入所者の行動を制限し処罰を与える権限が付与され、罰を受ける入所者を監禁する施設も作られた<sup>14</sup>。また、当時の法に照らしても違法<sup>15</sup>な断種手術や墮胎、同意のない病理解剖や胎児の標本作成<sup>16</sup>などが行われていた。入所者同士が結婚することもあったがその条件として断種手術が課され、特に戦前は複数の夫婦が同部屋に入居するといった状態であった。「患者作業」という名目で重症者の介護、炊事洗濯、農業、土木作業など様々な労働が課され、それは有償であったものの療養所外の水準に比べて著しく低い賃金しか支払われず、病状が悪化や後遺症の原因となることもあった（被害実態調査報告書: 73-81）。

このような著しい人権侵害があった一方で、療養所の生活は必ずしもあらゆる面で管理された閉鎖病棟のようなものだったわけではない。療養所ごとに差異はあるものの、多くの療養所で設立の初期から患者自治を求める動きがあり、管理者側との衝突や入所者間の軋轢を生みながらも、入所者らは徐々に自治を獲得していく（松岡弘之 2020）。各療養

に対する優生手術は大正時代から公然と行われていた。戦前にハンセン病患者に対する優生手術を合法化する動きはあったが、感染症であるハンセン病を優生手術の対象にすることの矛盾もあり、（実態は強制的なものであったにもかかわらず）患者の同意に基づく手術とみなすことで違法性はないという整理がなされていた（最終報告書: 195-206）。

<sup>16</sup> 病理解剖については国立療養所邑久光明園人権擁護委員会(2022)『邑久光明園における病理解剖の検証報告書』、胎児標本については「最終報告書」の別冊「胎児等標本調査報告」を参照。また、小松裕(2007)は医学系学術雑誌などを対象に医療者らの言説を分析し、ハンセン病患者に対する胎児標本の作成、女性の強制墮胎、男性のワセグトミー（優生手術）がなぜ行われるようになったのかを検討している。

所の自治会が発行している自治会史には療養所の生活の記録が多く残されている<sup>17</sup>。上述の患者作業については、本来は職員が行うべき療養所内の労務を患者に担わせるものであったのに加え、療養所の中で役割を果たすことが入所者の精神的慰安や秩序の維持に役立つという園当局の意図があった<sup>18</sup>。一方で入所者の立場から見ても、療養の身に強いられた労働という側面とともに、賃金をもらえるよう入所者たちが新たな作業を提案するなど、療養所における自治と生活を作り上げる契機となるものでもあった（松岡弘之 2020: 64-65; 青山 2014: 91）。また自治活動や政治運動だけではなく、文芸、陶芸、演劇など様々な文化的活動の同好会が結成されて、年中行事や運動会なども開催されていた。組織化された政治運動とも当局公認の文化活動とも異なる、療養所内の流動的な仲間集団による諸実践については有菌真代(2008)の分析がある。これらの文化活動もまた、入所者の慰安と秩序維持、そして療養所のプロパガンダのために役立つとする当局側の意図と、その意図も理解しつつ、ただ従属するのではなく主体的に自らの人生を豊かにしようとする入所者の意思が絡み合いながら行われていたものである。

1940 年代に特効薬が開発され、戦後にハンセン病は徐々に治る病気となってゆく<sup>19</sup>。戦後の民主化

<sup>17</sup> 例えば長島愛生園自治会編『隔絶の里程』(1982)、『曙の潮風』(1998)。これ以外にハンセン病者自身による手記や研究者、ジャーナリスト等による聞き取りなども数多く出版されている。1章でも述べたようにそれらの多くは「被害」を告発することに留まらないものになっている。研究者によるものは後述するとして依田照彦と同じ長島愛生園関連を中心に例をいくつかあげると、ハンセン病者自身によるものは近藤(2010)、加賀田 (2010) 、宮崎(2012)、ジャーナリストによるものは山陽新聞社 (2017)、高木(2017)など。

<sup>18</sup> 例えば愛生園長を務めた光田健輔は「癩村経営方法」として、「それまで暮らしていた社会で失ったものを、療養所という『新社会』で復活させる気持ちをもたせる」構想を持っていた（光田 1916）

<sup>19</sup> 1941 年にアメリカで効果が確認され、不治の病となっていたハンセン病を「治る病気」にしたのが特効薬プロミンである。ただしプロミンによってすべての患者がすぐに治ったわけではなく、1960 年代には薬剤耐性を持った「難治らい」が問題になっていた（田中 2016）。現在も治療の基本となっている

を受けて各地の療養所では自治活動が盛んになり、全国的に組織された患者団体による生活・療養環境の改善や隔離政策によって受けた損失の補償などを求めた患者運動が展開された。特に、強制収容の法的根拠であった癩予防法を時代にあわせたものに改正する「らい予防法闘争」が 1952 年から 1953 年にかけて展開されたが、1953 年に改正された「らい予防法」は従来の政策を基本的に維持するものとなった。しかし、退所支援や慎重な法の運用に慎重を期すことなどを内容とする付帯決議が盛り込まれるなど患者運動は一定の成果を挙げた<sup>20</sup>。

改正されたらい予防法に隔離収容や入所者の外出制限などの規定が残ったものの、これらはその後徐々に形骸化してゆく。また、特に若い世代では軽快退所する入所者も増加した<sup>21</sup>。らい予防法改正後の患者運動は、戦後も続いている患者作業の職員への置き換えや、患者の所得保証などに取り組み、その結果入所者の待遇は少しずつ改善されていったが、一方で 1959 年の国民年金法制定に伴いハンセン病患者にも支給されるようになった福祉年金の対象から在日朝鮮人入所者が除外されるなど、入所者内の格差の問題も生じた<sup>22</sup>。また、社会の側の偏見と差別は根強く残り続け、病気は治っても後遺症や家族からの拒否、就労の困難などで社会復帰することが

いる多剤併用両方(MDT)が導入されて有病率が急速に低下はじめたのは 1981 年のことである（儀同 2010）。

<sup>20</sup> 患者運動についての記述は主に坂田(2023)によっている。全国の療養所を統一した組織として、1951 年に「全国国立癩療養所患者協議会」が設立され、以後「全国ハンセン氏病患者協議会」(1953 年)、その後、「全国ハンセン病患者協議会」(1984 年)、「全国ハンセン病療養所入所者協議会」(1994 年)と名称を変えながら現在に至るまで運動を継続している。

<sup>21</sup> 森ほか(2019)によると 1907 年から 2010 年までの集計では、国立 13 療養所の総入所者数は 56575 人、うち軽快退所の人数は 7124 人で、もっとも多いのは改正らい予防法下の 1953 年から 1960 年代にかけてだが、戦前にも軽快退所した入所者は一定数いた。特に長島愛生園は他の療養所に比べて戦前の軽快退所数が突出して多かった。

<sup>22</sup> 療養所における在日朝鮮人の割合は日本社会の平均と比べて高かったことが知られている。在日朝

叶わない入所者も多かった。また一旦退所したものの、再発や後遺症の悪化、また高齢化による生活不安などで再入所する人もいた（被害実態報告書：128-136）。

隔離政策の法的根拠であったらい予防法廃止されたのは 1996 年のことである。1998 年には「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟が患者・元患者らを原告として起こされ、2001 年に熊本地裁で原告側勝訴の判決が下され、国は控訴せずに同判決は確定した。同判決では「遅くとも昭和三五年以降においては、もはやハンセン病は、隔離政策を用いなければならぬほどの特別の疾患ではなくなつておらず、すべての入所者及びハンセン病患者について、隔離の必要性が失われた」としている。2008 年には「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」（通称ハンセン病問題基本法）が成立し、また 2019 年には患者の家族たちが受けた差別に対しても国の責任を認めた判決が確定している<sup>23</sup>。ハンセン病が治癒した後も後遺症や様々な社会的要因から療養所を出て社会復帰をすることがかなわなかつた回復者は多い。全国に 13ヶ所ある国立療養所と私立の療

---

鮮人のハンセン病者については金(2019)の研究がある。

<sup>23</sup> 桑畠洋一郎(2025)は、家族らがうけた差別等の被害に対する国の責任を認めたハンセン病家族国家賠償請求訴訟において、ハンセン病者の家族を包括的かつ一律の被害者として捉えることには訴訟・運動戦略上の大きな意義があったとしつつ、「家族訴訟」までのハンセン病者家族は病者を排除する家族、病者とともに排除される家族、病者を受容する家族という 3 つの類型で描かれてきたこと、また（当然ながら）家族との関係や多様であり、同一の「家族」が異なる類型の姿を見せたり他の類型に変容していったこともあったことを指摘している。

<sup>24</sup> 厚生労働省は全国のハンセン病療養所の状況を毎年公表しており、それによると 2025 年 5 月の段階で国立 13 療養所の入所者数は 639 名、平均年齢は 88.8 歳であり、それに加えて私立療養所 1 施設に 2 名 の入所者がいる。厚生労働省ホームページ [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryou/kenkou/hansen/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/hansen/index.html) (最終アクセス 2025 年 11 月 12 日)。旧植民地に作られたハンセン病療養所のうち、韓国的小鹿島更生園（現国立小鹿島病院）と台湾の樂生院（現在は樂生療養院

養所である神山復生病院には回復者の方々が今も暮らしている<sup>24</sup>。入所者の高齢化が進む中で、療養所内の不動産をユネスコ世界文化遺産として、関連記録物をユネスコ世界の記憶（世界記憶遺産）として残そうとする運動<sup>25</sup>が始まるなど、いかにしてハンセン病の歴史とハンセン病者の生きた証を残すかということが喫緊の問題となってきた。

本章の最後に、日本のハンセン病についての学術的研究、とくに医学や公衆衛生ではなく人文社会科学の観点からの研究について概観しておく 1990 年代以降、歴史学、社会学、文学など多様な分野の研究者によるハンセン病の実証的な研究が出てきているが、それ以前から日本のハンセン病の歴史を書き残してきたのは、ハンセン病者自身、そしてハンセン病政策に関わってきた医師ら当事者であった。当事者による特筆すべきものとして各療養所において編纂された自治会史がある<sup>26</sup>。一方医者や事務官などによるものは、国のハンセン病政策を正当化し、関係者の献身と皇室の恩寵を称えるようなものが多く、そのような視点から書かれた歴史は「救癒の歴史」と呼ばれてきた<sup>27</sup>。しかし 1990 年代になる

に改名）は現在も運営されているが、日本のハンセン病政策の対象にはなっていない。

<sup>25</sup> 特定非営利活動法人 ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会 <https://www.hansen-wh.jp>

<sup>26</sup> 例えは依田が暮らした長島愛生園からは『隔絶の里程 長島愛生園入園者五十年史』（1982 年）、『曙の潮風 長島愛生園入園者自治会史』（1998 年）が出版されている。

<sup>27</sup> この中には、後述するように長島愛生園で気象・天文観測に深く関わった事務官の宮川量が 1930 年代に執筆した草稿を同園の医官であった桜井方策が戦後に補訂・加筆して園誌「愛生」に連載した「日本癪病史」がある。このテクストを分析した平井雄一郎による論文では、歴史叙述における「当事者性」について論じられている（平井 2012）。平井は歴史叙述と当事者性についての成田龍一の論を参照し、「救癒者の名誉回復」を図った桜井や宮川の〈偽りの当事者主義〉を基本的には批判的に論じつつ、外島保養院（当時大阪にあった療養所）を襲った室戸台風により娘を失った桜井や、病躯をおしながら専門であった園芸を入所者に指導し続けた宮川をそのような批判的論理に回収するだけで良しとすることへの躊躇を述べている。同論文の最後の注には「（元）患者さんにさえ、病弱

と、藤野豊の一連の著作をはじめとして、強制的な隔離政策の元で患者の人権を侵害してきた国の政策とその背景となる思想を告発する研究が出てくるようになる<sup>28</sup>。これらの研究はハンセン病当事者による運動を後押しし、やがてらい予防法の撤廃と国家賠償請求訴訟の勝訴にもつながる大きな意義があった。一方でそれは国の責任を告発することに注力するあまり、ハンセン病問題の全体像を単純化しているという指摘もある<sup>29</sup>。上述したように2000年代に入ってからは隔離政策の検証と告発に留まらない、ハンセン病者たちの多様な生の実践に目を向けた研究が増えてきている。

### 3. ハンセン病文学

一般に「ハンセン病文学」とされるもの、つまり近代以降のハンセン病療養所入所者による文学の歴史的変遷について先行研究に基づいて概観する。ハンセン病文学全集の編者である加賀乙彦は「小説の領域について私が言えるのは、ハンセン病文学とは、ハンセン病療養所に収容された人たちの作品であるということである。将来、探索の範囲がひろまり、民間に隠れ住んだ人、患者ではない人が病気や患者について書いた小説も、その枠内に入るのかもしれないが、今のところは、そういう定義でいいと私は考えている」と述べている（大岡ほか編『ハンセン病文学全集 1』 2002 : p468）。長島愛生園入所者であった依田の作品はこの定義に当てはまる。一方ハンセン病短歌を研究する松岡秀明は、患者でないものが一般的な知識やイメージにもとづいて詠んだハンセン病の歌や、医療従事者がハンセン病やその患者について詠んだ歌も「ハンセン病短歌」に含めている（松岡秀明 2019）。ハンセン病文学全集の刊行にあたっては、編集委員の中で「癩文学（Leprosy literature）」という言葉と「ハンセン病文学（Hansen disease literature）」という言葉のどちら

を気遣わながら想起される療養所職員・宮川量とはいったい何者であったのか。」と書かれているが、5章でも登場する愛生園気象観測所員との交流には、宮川の人物像の一つの側面が表れているのではないか。

<sup>28</sup> 藤野(1993, 2000)、澤野(1994)、荒井英子(1996)など。「ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書」もこれらの研究と同じ姿勢で書かれている。また、日本におけるハンセン病隔離政策が長期化し

らを用いるかで議論があり、鶴見俊輔や加賀乙彦が「癩文学」を推したもの、ステigma化された癩という言葉を使い続けるべきでないという元患者である編集委員の意見を尊重してハンセン病文学全集という名称になったことを Burns (2004)が指摘している。

ハンセン病文学のまとめた研究としては荒井裕樹の著作がある（荒井 2011）。療養所内で文芸の同好会が作られたり同人誌が発行されたりするようになってきたのは1920年前後からのことで、やがて各療養所の正式な機関誌として発行されるようになった。既に述べたようにそこには入所者の自発的な取り組みとともに、文芸活動を通じて入所者の精神的慰安を図り、もって入所者に落ち着きを与えて管理を容易にし、かつ療養所の生活を肯定的に描いた入所者による作品を対外的な宣伝、特に入所に抵抗する患者やその家族を説得するための材料に用いるという管理者側の意図もあった（荒井 2011: 37-42）。病者による作品ではないが、長島愛生園の医師である小川正子が全国各地の在宅患者に療養所への入所を促す旅を記録した手記『小島の春』（小川 1938）はまさにそのような意図で書かれたものである。同書はベストセラーになって映画化もされているが、その背景には当時のハンセン病文学への関心の高まりもあった（松岡秀明 2015a）。1930年代に貞明皇后の下賜金を元に設立された癩予防協会が全国の療養所患者から募集した「患者作品映画素材集」や「患者作品集」では序文に「癩豫防宣傳」を目的としていると明記されている。ハンセン病対策に積極的だったことで知られる貞明皇后の歌

つれづれの友となりても慰めよ 行くことかたき  
われにかかりて

は皇室の恩寵の下での救癩運動の象徴となっている（荒井 2011: 163-189）。

た要因を政策研究の視点から分析した戸引理による研究がある（戸引 2024）。

<sup>29</sup> 廣川和花(2011)はこれを「糾弾の歴史」と名付け、「救癩の歴史」と「糾弾の歴史」の二項対立を脱して、病者の多様な生存の営みを明らかにし、それを統合して近代日本のハンセン病問題をとらえなおすべきだとしている。同様の指摘は Burns (2019: 3-5)にもある。

終戦までの療養所で入所者が発表するものは園によって事実上検閲されていたこともあり、この時期の作品のすべて患者の自由な創作とナイーブにみなすことは難しい。しかし、北條民雄の「いのちの初夜」や明石海人の歌集『白描』を代表とする、病の体験を通じて人間の実存を描くような優れた作品が多く人の心動かされたのも 1930 年代である。この時期のハンセン病文学について、荒井（2011）は療養所生活を賛美し隔離政策の推進に与する入所者らの作品に「患者自身が療養所入所を、家族や社会、更には国家に対する病者自身の倫理的責任として引き受けよう」とし、積極的にその役割を担おうとする姿勢」が見られるとし（同書: 51）、そのような自己認識を植え付け、文学作品という場においてそれを表明させた隔離政策施政者側の戦略性が問われるべきだとしている（同書: 61）。一方 K. M. Tanaka は、入所者の作品が療養所の生活を肯定的に描くことは、隔離された生活の中で権力やスタイルなど様々なものと折り合いをつけながら自らの幸福を見つけようとしたことの現れだとしている（Tanaka 2013）。Tanaka によれば、療養所の生活を肯定的に書いた戦前の作品群はしばしば強制されたプロパガンダにすぎないとして等閑視され、皓星社のハンセン病文学全集にも収録されていないが、そのような見方は戦前のハンセン病文学の”conflicted and plural nature”を見過ごすものである<sup>30</sup>。

国家と社会に対する微妙な心情は戦時中のハンセン病文学にも表れる（荒井 2011: 218-266）。対米英開戦以降、国全体が戦争に総動員されてゆく中で入所者による作品も全体主義の様相を帯びたものが増えてくる。たとえば対米開戦の翌月となる 1942 年 1 月に発行された長島愛生園の機関誌「愛生」には、入所者と職員による「大東亜聖戦讃歌集」が掲載され（愛生 1944.1: 17-19）、依田もそこに数首を寄せている。同歌集には皇國を讃え開戦に奮い立つステレオタイプな戦時下の歌とともに、病のために国へ奉仕することが難しいことのどかしさが表れた歌がいくつかみられる。

戰ひの言にかかはりてうつしみの病ひ思はぬは  
幾日なるなん（羽藤守雄）

<sup>30</sup> Tanaka (2013) では隔離収容が始まってからプロミン登場までの 1909-1946 の文学を”Leprosy literature”、それ以降のものを”Hansen's Disease

國を擧げて大いなる戰ひなす時に務むすべなき  
病み居る吾は（西本茂）  
宣戰の布告に再起意氣立つも病める吾が身の口  
惜しかりけり（夏川清志）  
皇軍の武運ひたすら祈りつつ瀬戸の小島に吾病  
みて居り（成瀬和泉）  
病めるとも銃後に盡す道ありと子らに説きつつ  
堆肥集むる（片岡雅子）

ここには、戦争によって高揚する民族共同体への一体感と同時に、それでもなお消し去ることのできない疎外感が表れているように思われる。もちろんここで表明されている共同体への一体感がどれほど本心からのものだったかは分からぬ。入所者の中には朝鮮半島などの植民地出身者もいたことも想い起こすべきだろう。

入所者による文学作品の主たる発表先であった各療養所の機関誌はアジア・太平洋戦争末期の社会情勢と物資窮乏を受けて 1944 年 7 月を最後に発行停止するが、敗戦後に徐々に復刊する。戦後の復興と民主化を受けて文学をはじめとした文化活動も活発になり、「昭和 30 年代は園内に雨後の筈のように団体が生まれ」ている（長島愛生園入園者自治会 1982: 177）。1956 年には全国の療養所で詠まれた短歌を集めた合同歌集『陸の中の島』が出版されており、各園の編纂責任者のリストの中に愛生園の依田の名がある（木村 2022）。荒井によると戦後のハンセン文学はらい予防法闘争などの政治的運動とも密接に関わり、「隔離政策を告発し自己の尊厳を回復させようと試みる作品が多く見られ」た（荒井 2011: 292）。またハンセン病者による運動と文学は、結核患者および傷病軍人のそれと連動し、劣悪な療養環境の改善と生存権を求めて展開された「患者運動」と、患者らの生活や心情が表現された「療養文芸」を牽引した（荒井 2011: 268-271）。荒井の指摘の中で本稿の文脈で特筆すべきは、この時期の療養文芸の潮流に「『科学』への信仰とそれに基づく社会変革の必要性」が見られたという点である（荒井 2011: 273）。療養所における自然科学文化の重要性を説き、かつ戦後は自治活動や患者運動にも精力的に関わった依田の文学はまさ

literature”として区別している。『ハンセン病文学全集』への批判的な指摘は Burns (2004)にも見られる。

にそのような時代の精神に呼応していたと言えるだろう<sup>31</sup>。

#### 4. 長島愛生園の気象・天文観測

本章では依田が深く関わった長島愛生園の気象・天文観測について概略を述べる。文学以外にもハンセン病療養所では様々な文化活動が行われており、それらについての学術的な研究も出てきているが<sup>32</sup>、入所者による自然科学系の営みについて知られているものはほとんどない。その中で愛生園の気象・天文観測はその質と規模において他に類例を見ない特異なケースである<sup>33</sup>。

長島愛生園は、岡山県東部、瀬戸内海に浮かぶ長島に位置し、1930年に全国で最初の国立らい療養所として設立された。愛生園の気象観測所は、開園まもない1935年に設置され、気温、湿度、風向、降水などの気象観測が患者作業として入所者によって行われていた。初期の成り立ちについては長島気象十五年報（長島気象観測所 1955）に詳しく記述してあり、以下の記述も特に断らない限りそれに依っている。

気象観測所の最初の所員となったのは入園前に友禅の染織の仕事をしていた天野鉢太郎である。仕事上、天気を気にする習慣のあった天野に職員が声をかけて観測をはじめたことが直接のきっかけであるが、その前段階として、1934年の室戸台風により、公立ハンセン療養所である大阪の外島保養院が壊滅的な被害を受けたことがあった。当時の愛生園の光田健輔園長はこれを受けて愛生園の機關誌であ

る「愛生」に「天変地異に際して」という文章を掲載しており、そこで療養所に簡易気象観測所の設置することの必要性について言及している（光田 1934）<sup>34</sup>。観測所の設置にあたっては井上謙、宮川量といった園職員の尽力があり、岡山測候所から機材の貸与や観測の指導といった便宜が図られている。その甲斐もあり1937年頃には長島気象観測所は岡山測候所の正式な区内観測所として認められ、公的な気象観測データを提供することになった。区内観測所とは、1970年代に自動気象データ収集システム（アメダス）が全国的に展開される以前、気象官署から委託された市町村役場、学校、駐在所、個人などが毎日の気象観測を行っていた観測所のことである（池田ほか 2000）。愛生園の長島気象観測所はアメダスが設置された昭和54年まで、空襲により岡山測候所が機能しなくなっていた戦争末期を含めて一日も観測を欠かすことなくこの役割を果たした。この間大阪管区気象台長から表彰もされている。

病が進行した天野の後をついで1944年に気象観測所の主任となり、長島気象観測所における気象観測の充実と戦後の天文台設置に中心的な役割を果たしたのが横内武男である。上述の長島気象十五年報は横内が中心になってとりまとめたものである。同年報の後記で横内は気象観測にかける思いを以下のように綴っている。

直接観測に携わった幾多の病友の労も、この書の刊行によって報いられることと思います。この書を手にせらるる方々は、その諸表が単なる数字の羅列ではなく、その一つ一つに観測者の命が刻み込まれていることを知って頂きたいのであります。そしてこの資料を、あらゆる方面

<sup>31</sup> 例えば依田が愛生に発表した隨筆では、「戦後、殊にあの予防法運動以来、病友達の眼は内から外に向けられた。社会意識に眼醒め、社会につながる自己を発見した。そして、自己につながる社会の問題を考え、身辺の事象を冷静に考え、科学的に処理する方法を学んだー中略ー私達のやつている天文や気象の観測が今後の療園文化に寄与するのはこの点にあると思う。自然科学や社会科学の文化の一翼であり、従来の療園文化はこの面に於いて缺陷を持つ」（依田 1956）。

<sup>32</sup> 絵画活動については金(2015)、音楽活動については有園(2017)の研究がある。

<sup>33</sup> 愛生園の気象・天文観測についてこれまで筆者が報告したものには、磯部（2014）、磯部（2019）、磯部（2022）がある。また神谷美恵子『生きがいについて』には、気象観測所の仕事で生きる張り合いを見つけた青年のエピソードが登場する（神谷 [1966] 2004: 24）

<sup>34</sup> 同じ文章で光田は、患者が気象観測を行いその結果が園外の社会にとって有用なものとなるならば「病者にとりて、高尚な趣味となり、社会にとりては利益となるであろう」とも書いている。

に利用し、活用して頂きたいのであります。この書が、いささかでも世に益するがあれば私達の病める命を活かし得たことになるのです。

実はこの横内武男という人物は、本稿の主人公である歌人・依田照彦のことである<sup>35</sup>。依田照彦というのは横内武男が、短歌の発表のみならず対外的に手紙を出す際などにも用いていた通名（園名）である。しかし依田＝横内は、気象観測のデータを記した年報や岡山測候所とのやりとり、園の医者との共同研究など、気象観測に関わる事柄においては本名である横内武男を使っていた<sup>36</sup>。その理由を依田＝横内は書き残していないので推し量る他ないが、科学的な記録については本名で残すべきという強い思いがあったのではないだろうか。本稿では主に論じるのは歌人としての依田照彦であることから、以下でも特に必要がある場合を除いて依田の名を用いることとする。

気象観測所の活動が園外の社会からも評価されるほど際だって充実したものとなった背景には、園側の手厚い支援があった。恐らくそこには、入所者たちが充実した生を送っている良いモデルケースになるという、戦前のハンセン病文学に見られたものと同種の打算はあったんだろう。とはいって、井上、宮川ら気象観測所を後押しした職員と観測所員たちの間には人間的で暖かい交流があったようだ。そのことは長島気象十五年報に依田が書いた「気象観測二十年のあゆみ」という文章や、後にみる依田の歌でも示唆されている。

次に戦後になって気象観測所に設置された長島天文台について概略を述べる<sup>37</sup>。長島天文台の建設には二人の天文学者が深く関わっている。一人は、京都帝国大学の教授だった山本一清であり、もう一人は彗星や新星を多く発見したことで知られ、愛生園と同じ岡山県にある倉敷天文台でも活躍した本田実である。天文学の普及とアマチュア天文家の育成にも努めていた山本は何度か愛生園へ慰問講演に訪れており、恐らくそれをきっかけに、夭折した山本の弟子が所有していた口径五吋の反射望遠鏡が愛生園に寄贈され、天文台建設の話が持ち上がった。山本が残した膨大な資料は現在京都大学に保管されているが、その中から依田が山本に送った手紙が残されている（畠田 2012）。以下はその抜粋である。

私は兼てより星座や天文に趣味を持ち、先般先生が御寄贈下さった望遠鏡が設置せられたら、是非その方の係りにさせて戴こうと思っておりました。そして自來、夜空の星座を仰いだり、天文書を読んでひそかにその日の準備を致していました。（中略）私は昭和六年高工機械科卒業後東京目黒の海軍技術研究所に奉職致し、光学兵器研究室で山田幸五郎先生の下で、レンズの設計をしばらくやったことがあります。その頃より望遠鏡に非常な魅力を感じそれを通して観る星空に大きなあこがれを抱いて来ました。しかし今までその希望を叶える機会もなく打過ました。愛生学園にいた時は毎年夏期講習として、星座や星の話をプリントしては児童達と一緒に星の世界を眺めて楽しく宵を過ごしたこともあります。（中略）今後私はこの島に一章を終わる運命にあり、生をかけてこのことをやりたい念願です。

「誌発表作者別一覧」にも依田照彦＝横内武山として記載がある。

<sup>36</sup> 例えば日本気象学会の機関誌「天気」の「地方だより」のコーナーに長島観測所に関する記事を寄稿している（横内 1958）。また愛生園の伊藤正保医師との共同研究は患者の神経痛と気象（気圧配置）との関係を統計的に調べたもので、その成果は伊藤医師により「らい患者の神経痛と気象の関係に関する横内武男君の業績の紹介」というタイトルで園の医学雑誌「長島紀要」に報告されている（伊藤 1963）。

<sup>37</sup> 天文台とそこで行われた観測については磯部（2022）に詳しく報告されている。

<sup>35</sup> この事実を明らかにするに当たっては、依田＝横内本人を知る長島愛生園の自治会長に相談して了解して頂いた（磯部 2015; 2019）。依田が気象、天文観測に携わっていたことは短歌だけでなく本人や関係者や隨筆で繰り返し明らかにされており、横内の名前で編集された気象観測二十年のあゆみを執筆していたことを示す歌も掲載されている。また依田はごく初期に横内武山という、横内武男によく似た筆名でも短歌を発表しており、皓星社発行のハンセン病文学全集（8 短歌）では依田照彦と同一人物として掲載されているほか、愛生 1970.10（昭和 55 年 10 月号）別冊（開園 50 周年記念号）の「本

この手紙からは、天文学にかける依田の熱い思いだけでなく、依田が高工（旧制の高等工業学校を指すと思われる）をでて海軍技術研究所で働いた経験のある、当時としては比較的学歴の高い人物であったことも分かる<sup>38</sup>。

天文台建設に関する園とのやりとりは昭和17年頃から始まっているが、戦中戦後の混乱をはさんで、天文台が竣工したのは昭和24年6月のことである。竣工後は、恐らくは山本の指示をうけた本田が倉敷天文台からしばしば園を訪れていて観測の指導を行っていた。天文台の完成後は太陽黒点の観測が観測所の業務として晴れた日は毎日行われ、その結果は月ごとにまとめられて山本が京大退官後に設立した田上天文台や東京天文台（現国立天文台）へも送られていた。星の掩蔽観測や、観測所員以外の入園者に向けた観望会なども開いていたようである。

天文台の観測は昭和30年台後半には終わりを迎えていたようだが、その理由ははっきりしていない。一方気象観測は、依田の後をついで1960年に観測所主任となった森田峯夫が、アメダスが設置されて長島観測所が区内観測所としての役目を終えた後も2011年末まで続いている（磯部2022）。

『依田照彦歌集』には園内の風景と思われる写真が何枚か掲載されているが、それらは森田が撮影したものである。森田は愛生園の気象観測を振り返った短いエッセイを1979年と2010年に愛生に寄稿している（森田1979; 2010）。

## 5. 依田照彦の短歌と人生

本稿の主題である依田の短歌をその人生を追いかながら取り上げる。依田がその半生を直接的に書き残したものはなく、その人生は依田の死後に刊行された『依田照彦歌集』の内田守人による序文と千葉修によるあとがき、そして同じく千葉が「愛生」に寄稿した依田の追悼文（千葉1972）でわずかに語られている。依田を知る人々はみな依田を寡黙な人物

<sup>38</sup> 旧制高等工業学校は旧制専門学校の一種であり、その多くが戦後の学制改革で4年生大学の工学部の母体となった。また海軍技術研究所は海軍における最大の研究開発機関の一つであり、依田が奉職

と評しており、特に自分の生い立ちや家族のことなどを周囲に語ることは少なかったようだ。千葉は「依田照彦歌集」のあとがきに、歌集の編纂過程でその歌から依田の境遇を知ることもあったと書いている。松岡秀明(2015b)によれば、明石海人の「白描」もまた「癪患者の生を短歌によって世の人々に知らしむることを意図したライフヒストリー」としての性格を持っていた。本章でも、短歌以外の資料からわかる情報を補足しつつ、依田照彦の人生をたどりながらその歌を読んでゆく。

なお、千葉修は依田とともに気象観測所、長島短歌会、そして愛生園自治会でも活躍した、依田の盟友ともいえる人物である。愛生園の機関誌「愛生」には、戦前から戦後にかけて頻繁に千葉と依田の短歌が掲載されている。ただ、依田に比べて千葉の方は気象・天文観測を題材に詠むことは少なかったようである。内田守人は愛生園でも勤務経験のある医師であり歌人でもあった人物で、愛生園だけでなく各地の療養所でハンセン病患者への短歌の指導も行っていた（松岡秀明2016）。内田が編者を務めた歌集「三つの門」に依田自身が記したものによると、内田以外に依田が短歌の指導を受けたのは杉鯨太郎、鹿児島寿蔵、大村呉樓、奥谷漠といった歌人である。

以下で取り上げる依田の短歌は多くは「依田照彦歌集」に掲載されているものである。同歌集に掲載された歌については末尾に歌集の頁のみを記している。ハンセン病文学全集（8短歌）から引用したものはその旨と頁を、「愛生」および「短歌研究」に掲載されたものは掲載誌と掲載年月を記してある。

### 発症から再入園まで

依田照彦は1912年（大正元年）、香川県に生まれた。姉一人、妹二人がいたが男兄弟は依田一人であった。父親は早くに亡くなつたようだが、その父を懐かしく思い出す歌がいくつか詠まれている。

寒き夜を抱かれ寝ねし亡き父の髭の感触かすかに保つ(p108)

していたと思われる時期と遠くない1936年の時点では同研究所の職工690名のうち大学卒が18名、専門学校卒が46名であった（沢井2008）。

テープより流るる声は吾かはた遙かなる父が我を呼ぶ声か(p107)  
亡き父に似て來たるかな今宵ガラスに禿げ上りたる額がうつる（愛生 1951.8）

亡父の残像をずっと心に保っているのだろう。その手触りが「かすかに」なっても「遙か」なものとなつても。その記憶が遙か遠いかすかなものとなってしまった理由には時間の経過だけではなく、断絶がある。ハンセン病を発症する以前と以降という断絶。3首目、ガラスに映し出される自らの中に、父の面影を認める時、それは、病を得なければ自分も父となっていたかもしれないという、あったかもしれないもう一つの世界。その世界を思う時に受ける虚しさを、次の歌からも読み取ることができるだろう。

遠くひびく官舎の子等が夕べの聲父ならぬ身の虚しさを衝く（短歌研究 1954.12）

山本への手紙によれば依田は1931年に高工を卒業して東京・目黒の海軍技術学校に奉職している。この頃は叔父が後見人役をしていたようだ。そして、ハンセン病の診断を受けたのも恐らくこの頃である。

診断を言ひ聞かす叔父と罷り来し武蔵野の道のながき夕映 (p52)

武蔵野とあるので、海軍技術研究所に勤めて東京近郊に住んでいた時に診断を受けたということであろう。ハンセン病と診断を受けた時の衝撃はハンセン病文学の典型的なモチーフの一つである。

病みてより二十三年健やかに在りし記憶も前の世のごと (p58)  
癩故にみだれむよりは自決せよと言はれし言葉今に忘れず (p51)

1首目の「前（さき）の世のごと」は、短歌表現としての大振りで創造的な比喩というより、依田の実感であったのだろう。病の前と後とでは、まるで違う人生を歩んでいるようだ。健やかであった自分と今の自分とは、繋がっていないように思えたのだろう。2首目の「自決せよ」とは誰に言われた言葉であつただろう。身近な存在かもしれない。それは、依田のためを思つての言葉であったのだろう。

そして、言ってそのまま忘れてしまつただろう。今、病を得て生きている私とは何か。なぜ生き続けなければならないのか。存在を否定されたとき、残るのは存在の問いだ。

依田が愛生園に入園したのは1931年のことだが、直後の1931年から1938年にかけて武山または横内武山という名で愛生に短歌を発表しており、依田照彦という名を使い始めたのはおそらく再入園以降のことである。武山の歌は依田照彦歌集には含まれていないがハンセン病文学全集には収録されている。

海のべの家にしあれば風の夜は夜すがら浪の音をきくあり（全集 p33）  
小夜ふけて生温き風ふき出でぬ公孫樹の若葉闇に騒げり（全集 p35）  
一とすじの白き山路の一ト所水湧き出でて湿りをもてり（全集 p39）  
珍しき大雪の日なり未知の雪蹴散らしゆけば心ときめく（全集 p34）  
山躑躅君が拓きし道の辺に空しく咲きて人今はなし（全集 p37）  
寒き夜は我を抱きてねし父の酒臭き呼吸今も忘れず（全集 p66）

1、2首目。風と浪の音。風と公孫樹の葉擦れ。湧き出で温る水。世界とは、自然とは、そこにただ横たわっているのではなく、息づいているという実感。自然の躍動と対をなすように、それを感受し続ける依田の静かな態度も見えてくる。その自然を自らの足で蹴散らす時、4首目のときめきとなって依田の心に返ってくる。「未知の」という硬質な表現が、雪のきらめきを加速させる。5、6首目では、その感受がいまここには居ないものに向かう。ここに残された山躑躅は道を拓いた「君」の、依田は自身を抱いてくれた「父」の存在証明のようにここにある。

病状が軽快したことと、家庭の事情からまもなく退園し、大阪で働いた。依田はこの時期の体験をあまり短歌に残していないが、約20年後の1958年に「愛生」に掲載された隨筆「蜂蜜とピッケル」で当時勤めていた工場で出会った青年との交流を書いている（依田 1958）。そこには青年期の幸福な日々の思い出とともに、何一つかくしごとはないほど心を許しあった友にも病のことだけは話すことがで

きずにはいた苦しさが書かれている。8年続いたこの時期に、姉の嫁ぎ先に身を寄せていた母をひきとつて共に暮らし、また一家の長として妹二人を嫁がせることができたことは依田にとって大きなことであったろう。

病秘め父亡き後を妹ら嫁がせたりき罪の意識もて（p44）

1940年3月に再入園した後、しばらくは家族との交流があったようだ。戦時中の愛生誌には、3年ぶりに一時帰省した際のことを詠んだと思われる歌や、家族からの便りを楽しみにしている歌がある。

吾が部屋の組立書棚の鐵棒も捧げてられなし三年振りの家に（愛生 1943.9）

佛前に暇を告ぐる吾がかたへ經誦す母のみ聲しづめり（愛生 1943.9）

珠數もちて吾の五體をさすり給ひし盲の母思へば泣かるる（愛生 1943.9）

見えぬ眼に吾をいたはり送り呉れしたらちねの母よさびしく在さむ（愛生 1943.9）

しづかなる吾が明暮に彈のごと心にひびく吾家の便り（愛生 1944.7）

目の廻る生活の中ゆ弟吾を忘れたまはぬ文は身に沁む（愛生 1944.7）

殊に3首目は鮮烈である。病んだ自らの躰の隅々に触れ、回復を祈った母。直情的かつ通俗的に見える「盲の母思へば泣かるる」という表現が、ここでは母への感謝や悲しみ、やるせなさがないまぜとなつた思いとなって読者の心を揺さぶる。

だがやがて家族との縁は断たれてゆく。依田の歌からはそのことを自らの運命として静かに受けとめようとしていることが感じられる。

細々と保ちし絆断たれたる返送の葉書掌に重く受く（p203）

はらからの行末のためよしとして戻りし朱印の葉書をしまふ（p203）

妹二人のゆくすゑのため自らの消息たちて過ぎぬ十年（p43）

行き先を告げずに転居したのだろうか。あるいは受け取り拒否の願い出をしたのかもしれない。「よしとして」「ゆくすゑのため」と、妹たちの幸いのた

めであればと自分を納得させながらも、「重く受く」にはずしりとした痛みが描かれている。時間が露わにしてしまう傷というものもあるのだ。

臨終にも吾が名呼ぶなく逝きしならむ母の心を吾は知りおり（p26）

みまかれる母の形見と数珠一つ封筒に入れ送られて来ぬ（p53）

幾万遍老の思ひにつまぐりし数珠滑らかに吾が掌をすべる（p54）

母と依田との心身のつながりは、皮肉にも病を通じてより深く強いものとなった。臨終の時に息子の名を呼ぶことのできない哀しみを、自分だけはわかっているという確信。遺品として送られて来た母の数珠を手繕りながら、依田は母との記憶を数えたのだろう。

### 教育者として

依田には教育者としての側面がある。1931年の入所直後の時期に園内の少年舎の「お父さん（子どもたちの世話をする寮長）」を、軽快退所を経て1940年に再入所した後に園の子どもたちのための「愛生学園」の患者教師を務めた。依田照彦歌集には掲載されていないが、戦前の「愛生」には教師としての体験を詠んだ歌がいくつかある。

昨日の會に踊りし少女今朝會へばはにかみもしもの云ひぞする（愛生 1940.9）

昨日の會に踊りし少女耳うらに白粉残るを言へばはにかむ（愛生 1940.9）

職員室の机のまはり教子等たかり我にもの云ふ友だちの如く（愛生 1940.9）

兒等に見すと鉤に乗せ來し冬の蜥蜴ぼとりと落ちぬ日向の土に（愛生 1941.2）

朗かに常遊べども癩の兒等口に言はざる愁ひ持つなる（愛生 1941.3）

考査にて兒等しづまれる窓の外は荒ぶる風が松をゆすれり（愛生 1941.5）

1、2、3首目では、「はにか」んで、「友だち」のように戯れてくる子どもたちの姿がみずみずしい。4首目、子どもたちのために蜥蜴を見せてやりたいと思う依田の心にもまた、少年の心がよみがえっているようだ。しかしハンセン病であることは、影のように必ずついてくる。5首目。こんなに無邪

気な子どもたちも「愁ひ」を抱えなければならないのだということ、その大人びた密やかな「愁ひ」に、依田は驚いたのかもしれない。

光田園長を代表編者として愛生学園児童の文芸作品を掲載した書籍『望ヶ丘の子供たち』があるが、再入園したばかりの依田は患者教師として同書の編集に中心的になって奔走し、自らも「癪兒の教育に就いて」と題した文章を寄稿している（長島愛生園教育部 1940: 288-294）。そこに書かれている教育観は熱意と使命感にあふれている一方で、光田園長をはじめとした園当局の意に完全に沿う優等生的なものである<sup>39</sup>。だがその後戦況が悪化し、その影響はハンセン病療養所にも及んでくるにつれ、依田は教師を辞することを決める。以下は、長島気象十五年報に依田が記した「気象観測二十年のあゆみ」からの引用である（長島気象十五年報: 262）。

私は昭和 15 年 3 月に入園し、4 月以来愛生学園の教師となって、病児の教育を受持ってきました。私は生涯の病を負う児童達に接してみて、如何に教育すべきか随分悩みました。そして、このような児童達には各自の個性を見出して、それを充分に伸ばしてやる特殊な個性教育がよいと考えたのでした。ところが戦は益々進展し、盲目的な全体主義は、隔絶された癪園の片隅にも及んで来ました。手萎え足萎えの病児達に木銃を持たせ、堆肥を擔わせ、褚土の山慮に唐鍬を振わせました。児童達は教場では病苦と疲労のため居眠りをはじめます。私はそれをしかることは出来ませんでした。一人の人間が如何に力んでみてもこの状態を阻止することは出来ません。そして私は教師を辞めました。人間を相手としない仕事、自然の中に没入出来る仕事、雲の流れや風の動きに意義を見出せる仕事。そこでわたしは気象観測の仕事を撰んだのでした。日出の寮舎から光ヶ丘の坂道を登つてくると、松の間に白い観測台と百葉箱がしづかな大氣の中で私を待っていました。私はこの仕事に生涯をかけようと決心しました。

## 戦争

<sup>39</sup> 宇内一文(2006)による愛生学園を事例にハンセン病療養所の教育機関の研究では、依田の名前は記されていないが、同書を編集した「長島愛生園教育

2 章で述べたように、戦時中の全体主義はハンセン病療養所にも及び、日米開戦直後には愛生に「大東亜聖戦讃歌集」が掲載されている。同歌集に依田が掲載した歌が以下である。

潮さやぐ磯の宮居に朝な朝な心こごりて勝戦祈む（愛生 1942.1）  
國舉りみなぎりたぎつ勢にさやるものみな撃ちてし止まむ（愛生 1942.1）  
大君の詔勅のままに一億が命捧げむ時と來向ふ（愛生 1942.1）  
神猛るこのいきほひに生ぬるき生活思はば恥ぢて死ぬべし（愛生 1942.1）

いずれも戦時下の軍国主義的な歌として典型的なものである。依田は愛生誌上のテーマ詠企画「撃ちてし止まむ」（愛生 1943.3）と「皇太后陛下御坤徳奉讃歌」（愛生 1944.6）においても、「大東亜聖戦讃歌集」と同じように軍国主義的で皇室賛美の歌を寄せている。

癪者等の呻きにさへやみなぎらふ國ついかりを  
米英よしるや（愛生 1943.3）  
夜半澄める月にかも似てみ恵はいよよさやけく  
ゆたに遍し（愛生 1944.6）

このような軍国主義、皇国賛美の思想を依田がある程度は実際に持っていたのかはわからない。2 章で「大東亜聖戦讃歌集」から引用した歌に見られるような、病のために国に貢献することが難しい疎外感や屈折した感情は見て取れず、表面的でステレオタイプな表現にとどまっていることからも、その時の時代の風潮に合わせて体裁を作っていたにすぎない可能性も伺わせる。「勝戦」「撃ちてし止まむ」「一億が命捧げむ時」「神猛る」など戦時下で反復された語彙が、依田の個性や内省を希薄にしていて、いずれの歌も国策や戦意高揚の枠組みにとどまっている。対米開戦以降 1944 年 7 月に「愛生」が休刊されるまでの間、依田の短歌は 2 ヶ月に 1 回程度のペースで同誌掲載されているが、これら以外の歌は、家族、自然、気象観測などに題材を取ったものが大半であり、勇ましい軍国主義的な歌は見ら

部」の教育観が表れているものとして依田の文章から 3 ヶ所引用されている。

れない。戦時下の生活に題材を取った数少ない歌が、休刊前最後の号に掲載された以下である。

父祖の地をすでに賣りたる吾一家疎開となれば  
いづち行かむか(愛生 1944.7)

屑芋を残して全部供出せし今日百姓の氣持がわ  
かる(愛生 1944.7)

先に、愛生学園の教師をしていた時に依田が書いた「癩兒の教育に就いて」という文章と、戦時体制化で子どもたちに満足のいく教育をしてやれないことに絶望した依田が愛生学園の教師を辞めて気象観測所に写ったときの心情を述べた「長島気象十五年報」の文章を引用した。「癩兒の教育に就いて」が書かれたのは依田の愛生園再入園直後の1940年のことである。この時期は依田にとって、病の再発による再入園という挫折をなんとか乗り越えて、療養所での人生を意味のあるものにしようと奮闘していた時期であっただろう。もしかしたら1941年暮の対米開戦は、前向きな気持ちを持とうとしていた当時の依田の心情にある程度は沿ったものだったのかもしれない。しかしその後、1942年6月にミッドウェー海戦の日本海軍敗北、1943年5月のアツ島玉砕と戦況は悪化し、それに連動して社会の雰囲気も依田個人の人生も暗転する。依田が教師をやめて気象観測所員になったのは1943年8月のことである。1944年の依田にとっては、自らを重ねることができるのは天皇に命を捧げる一億の国民ではなく、食料を供出して手元には屑芋しか残らない百姓であった。

## 気象・天文観測

1943年8月に気象観測所員となった依田は、前任者の病状悪化を受け、翌年8月に観測所主任となる。気象観測を詠んだ歌を見ていく。

瀬戸の海はさやかに晴れぬ屋上の観測台に今朝  
は麥干す(愛生 1951.1)

眼尻刺すあげ潮風にうづくまり入江に今朝の水  
温はかる(p35)

ペン軸の尻にて算盤はじきつつ手菱のわれの事  
務がはかどる(p35)

蝶も蛾もすでに来らず冷ゆる夜の観測終へて晩  
き灯を消す(p36)

1、2首目では、思うように手を動かすことができないながらも、気象観測に従事する姿が「瀬戸の海」「あげ潮風」という風景の中に清々しく描かれる。4首目で詠われているものは、観測者としての矜持だろう。孤独に作業を終える姿に、淡々とした達成感が見える。

科学者なら共感する人が多いであろう日常を詠んだ歌が次である。

まとまらぬデーター乱れし机の前暑き西日がカ  
ーテンを洩る(p75)

気象學の本幾冊か重ね置き根気つづかず過ぎて  
ゆく日日 (愛生 1951.8)

データーを記した紙や専門書の山を横目に、日々気象観測の仕事を行っていたことがわかる。仕事が捲らない自分自身の姿もまた観測対象であるようで、日常を見逃さない觀察眼とほのかなユーモアまで感じができるだろう。

次に天文観測に関する歌を見てゆこう。まず目立つのは太陽黒点観測に関する歌である。なお太陽観測においては、接眼レンズをのぞき込むのではなく望遠鏡の焦点面に結ばれる太陽像を白い紙に投影し、そこに現れる黒点を写し取っていたと考えられる。

砲身の如き鏡筒微動して五吋反射望遠鏡に太陽  
を追ふ(p66)

天空に気流の乱れあるらしくゆらゆらとしぬ陽  
の映像は(p66)

分裂し環礁のごと散りばへる黒点群を克明に写  
す(p67)

百二十倍に投影したる光円に大黒点は環礁の如  
し(p67)

陽の像をけぶりの如くかすめ去る雲ありしばし  
写す手を擲く(p67)

上空の大気のゆらぎにより像が揺れて見える様子は、望遠鏡で太陽や月などを観測したことがある者にはリアルな描写として感じられるものである。残念ながら依田の手による黒点スケッチや観測記録は発見されておらず、依田が実際に見た太陽黒点がどの日のものは分からぬが、病に伴う視力の低下のため、依田自らが精力的に天体観測を行ったのは天文台が落成した1949年6月からせいぜい1,2年

のことであった。太陽黒点の数は約 11 年の周期で増減することが知られており、1949 年頃は黒点が多くかった時期に相当する。図 1 は大きな黒点群が出現していた 2017 年 9 月の太陽の写真であるが、まさに「環礁」のようである。



図 1 2017 年 9 月 5 日の太陽黒点（京都大学大学院理学研究科附属天文台提供）

1951 年頃には依田は病の影響で視力を失いつつあり、そのことに対するショックと焦りが歌にも表れている。

黒点観測の途拓きたる今にして侵さるる眼を如何にかはせむ（愛生 1951.10）

だが、衰えつつある視力の中でも観測をしようとする経験は歌人としての依田の創作意欲をむしろかき立てたのかもしれない。

レンズ一杯に黄金の光たたへたる月面に薄き眼をこらす(p48)

あきらめてゐし眼にかすかに木星の衛星が見ゆるよ一つ二つ三つ四つ(p47)

1 首目は、輝く月面と光を失いつつある目のそれぞれの球体のイメージが重なる。2 首目の結句「一つ二つ三つ四つ」は強い印象を残す。ひとつずつ積み上げてゆく数、そして大幅な字余りが、木星のさら

にその衛星を見ることのできた感慨を鮮烈に写しとっている。

### 愛生園で関わった人々

園での生活や気象・天文観測を通じて依田が関わった人々を詠んだ歌を見てゆこう。上述のように、天文台の建設とその後の観測には山本一清と本田実という二人の天文学者が深く関わっていた。元京都帝国大学の教授であり著名な天文学者であった山本一清は、依田からするとやや遠い存在であったのか、山本のことを詠んだ歌は見当たらない。一方、おそらくは山本の紹介を受けて愛生園に足繁く通い天体観測を指導していた本田実を詠んだ歌はいくつかある。以下は天文台の完成前の昭和 24 年 4 月の愛生に掲載されていた歌で、「本田実技師を迎ふ」という章題がついている。

休日の洋館の廊下しんとして人を待つ間の落ちぬ心(p68)

人気なき渡り廊下の向こうにて風吹く毎に扉のきしむ音(p68)

遠くきく石廊に靴の乱れつつ近づきし中に本田技師のみ声(p69)

日溜りの壁にもたれて時待つに転がる落葉のさまも目にとむ(p69)

君が掌に載せて明りに見するミラーまことカルバーのサインがありぬ(p69)

1 首目から 3 首目では「しんとして」「扉のきしむ音」「靴の乱れ」「み声」といった聴覚の感受が印象的だ。病んだ目ではなく、耳で受け取る空間的な広がりと奥行きの中に、本田実も立体的な輪郭をもって立ち現れる。

本田は高等教育こそ受けていなかったが、アマチュアの育成に力を注いでいた山本の指導を受け、生涯に彗星を 12 個、新星を 11 個発見している世界的にも知られた天文家であり、当時は倉敷天文台の台員（後に主事）であった<sup>40</sup>。昭和 22 年に日本人初の新彗星「本田彗星」を発見したことは間違いないなく依田も知っていたんだろう。大スターに会うような気持ちでいたのではないか。まだハンセン病への激

<sup>40</sup> 本田実の来歴と業績については倉敷天文台ホームページ [http://kuraten.jp/about\\_honda.html](http://kuraten.jp/about_honda.html)（最終アクセス 2025 年 11 月 12 日）

しい差別があった戦後間もない時期にもかかわらず、ジョージ・カルヴァー作の望遠鏡のミラーを手に取りサインが読めるほど近くで依田に見せていた情景からも、本田の人柄が伝わってくるようである。依田がそれ以後も本田を慕っていった様子は、後に発表された以下の歌からもわかる。

本田技師さきくいませり辛うじて読み終へし倉敷天文台新装の記事(p49)

気象観測所と天文台に関連して依田が歌に詠んだもう一人の人物が、園の職員である宮川量である。宮川は、岡山測候所や倉敷天文台との折衝にあたるなど気象観測所と天文台の設置に尽力しており、山本に直接手紙を書くよう依田に進めたのも宮川である。1949年に宮川が「愛生」に発表した「長島気象十年の研究上梓を祝ひて」という文章<sup>41</sup>は、長島気象観測所の歴史を振り返るとともに、『最後に横内兄千葉兄どうか眼を大切にして永く永くこの仕事をつづけられるよう、お祈りしています』と、気象観測所の中心人物であった依田（横内）と千葉修に対し、「兄」を付けて敬愛し労う言葉で締めくくられている。

その宮川は天文台落成後まもない昭和24年に逝去了した。翌年「愛生」では宮川を追悼する特集が組まれ、依田も10首余りの歌を寄せている。そこから2首を引く。

<sup>41</sup> 愛生 1949.4. 同じ文章は「長島十五年報」や、宮川の遺稿集「飛驒に生まれて」にも集録されている（宮川 1977: 242-245）。

<sup>42</sup> 短歌以外では、「長島天文台と太陽観測」（依田 1956）というエッセイの中に依田の光田に対する微妙な感情が表れている数少ない文章がある。長島天文台の完成後に山本一清が園を訪ねてきたときのことを書いた部分である。以下引用。

私が近づくと園長先生は空いた椅子を示し掛けるようにすすめられた。その様子には何の不自然さもなかつた。鼎談の形で話が始まり私はスケッチを繰つて山本先生に見せて観測上の質問をした。山本先生は一々丁寧に説明して呉れた。私の背後には佐伯、大野の両君が控えていて先生の説明をきいていた。光田先生も教えを受ける態度で聴いておられた。それは謙虚な科学者の態度であった。

まぼろしに君を思ひて佇ちゐたり木の香あたらしき天文台に (p29)  
遺児三人そのかの母にまつはりて棺の前に額づきぬああ(p31)

「木の香あたらしき天文台」と「遺児三人」と「母」。残されたものを描くことは、宮川の不在を描くことである。

依田には光田健輔園長を詠んだ歌も多い。よく知られているように光田は生涯をハンセン病に捧げ、「救癪の父」とも呼ばれると同時に、戦後も続いた隔離政策を推進した中心人物でもあり、その評価は分かれる。光田は気象観測所と天文台には強い関心を示し、一貫してサポートしていたようである。そのことは依田の歌にも表れている。

病む者を深く恃みて気象観測ここに創めしも君がたまもの(p88)  
報ゆるに術なき恩に報いんに気象観測吾はげむべし(p89)

一方でこの後述べるように依田は戦後に園内の政治運動にも中心的に関わっており、その点では光田と戦う立場にあった。依田は「気象観測二十年の歩み」でも光田への感謝を繰り返し書いており、また光田を詠んだ歌の多くも彼を讃え、慕うものであるが、絶大な権力を持っていた光田との関係を考えればそれだけが光田に対する依田の感情であったとナイーブに受け取ることはやや躊躇される<sup>42</sup>。依田が

話は三十分くらいで済んだ。私はお礼を申し上げて立ち上がつた。

その時光田先生は、私の座つていた椅子を持って歩き出した。私はあつけにとられて見ていると、分館玄関口まで運んで行かれた。そして、そこにあつた洗面器の昇汞水をその皮椅子の上に流した。之には私も驚いた。今まで好い氣で雲の上に乗つていたのが忽ち地上に落ちて尻餅をついた感じであつた。園長先生は私の気持などお構いもなくにこにことしながら山本先生を伴つて本館に引き上げられた。

私はその短い時間に光田先生のさまざまな面を観た。人間として、科学者として、そして園長としての光田先生を。私は一入園者対園長の関係から、一步立ち入つて園長を理解出来るような気がした。

光田をどう捉えていたのかの判断は保留し、二人の関係の機微が表れているように思われる歌を2首紹介する1首目はおそらく政治活動のため外出していた依田が、園外で光田と会った時の歌、2首目は光田の死後、園内で火災があった際の歌である。

反逆の吾を責むるなく近寄りて掌に載せくれし  
五十銭玉二つ（p47）  
焼け跡に遺れる石の太柱亡き老園長たたずむ如  
し（p243）

「反逆の吾」とは、愛生園長であり隔離政策の中心人物でもあった光田と鋭く対立することもあった患者運動に依田が深く関わっていたことから来ている。「五十銭玉二つ」の数と感触のリアリティ。この二つの硬貨に視点と感情が集約されてゆく。光田の存在の大きさが香りつつ立ち上がるような2首である。

依田の人間味を感じられる歌として、女性に対してやや不慣れで不器用な自分を詠んだ、どことなくユーモアのある歌がある。

朝の膳ベッドに運ぶ白衣より昨夜の祭の移り香  
にほふ（p70）  
病衣の紐結ばるるとき母のごと豊かなる胸がわ  
が前にあり（p71）  
視えぬ眼を女医に診らるる憔悴に伸びたる髭も  
見られゐるべし（p95）

いずれも、看護婦や女医との関わりを詠んだ歌である。1首目、祭の移り香とは、花火や露店から流れてくる焦げたような火薬の匂いだろうか。その香から、笛や太鼓の賑やかな音を、提灯や踊りの彩りを思い浮かべたのかもしれない。2首目に描かれるのは、母を懐かしむ心とどぎまぎするような気持ち。外に出ることが叶わず、また手を思うように動かすことができないという不自由さが、依田の想像力を時間空間ともに遠くへ運んでいる。

### 病について詠んだ歌

多くのハンセン病歌人と同じ様に自らの病について詠んだ歌が多いが、依田にはあまり病苦を呻吟す

---

このエッセイが「愛生」に出版されたのは昭和31年のことである。光田が園長を退官したのは昭和

るような歌はみられない。むしろ病の体を淡々と客観的に観察するような歌が目にとまる。

下駄ひきて足萎え吾の歩むさま猫は見てをり地  
に首つけて（p57）  
生姜に似たりと思ふ掌に配給の生姜載せて貰い  
ぬ（p64）  
痛覚の失せし指より血の噴くを生けるしと  
見つめてゐたり（p246）

「猫は見てをり」「生姜に似たり」「見つめてゐたり」に見られる、病の自分を外側から観察しようとする視点。主觀から逃れる軽やかさが、愛らしさやユーモア、生きることへの端的な問いを連れてくる。

次の歌には「暗順応衰」「表皮神経」「タングステン線」といった科学用語が用いられている。科学者である依田と、歌人である依田とが、表現の中ではこのように出会うのだ。

暗順応衰ふる眼にしばらくは画廊のくらきしじ  
まに立てり（p38）  
渋紙を貼り付けしごと狂ほしや麻痺兆す頭蓋の  
表皮神経（p40）  
メス入れし剝那瞳のゆらめきてタングステン線  
あざやかに冴ゆ（p72）

視力を失うことや容貌が変わってゆくことへの不安を吐露した歌も「暫しの間まぼろしに向けて安ら  
はむとす」「この顔が鏡の中に泣き笑ひせり」と、どこか抑制的である。

来るものが來たりしと医師の君は吾の癪性角膜  
混濁を告ぐ（p39）  
盲ひゆかむうつは寂し暫しの間まぼろしに向  
きて安らはむとす（p58）  
眉毛落ち唇歪みたるこの顔が鏡の中に泣き笑  
ひせり（p49）

病が進行して視力を失ったことで、依田は不自由舎へ移る。当時の不自由舎はまだ複数人の雑居部屋であった。依田が自治会や患者運動に深く関わっていたのには、プライバシーを得て静謐な生活を送り

32年であるから、依田はこれを光田が園長とし在園している間に出版したことになる。

たいという個人的な思いもあったようだ（その願いはやがて実現する）。また、ハンセン病の典型的な症状に視力の低下に加えて手足の知覚麻痺があり、このため舌や唇を使って点字を読むことが行われていたが（立花 2008）、依田も一時期この「舌読」をしていたことがわかる歌もある。

方寸の視力のままに移り来し不自由舎に一生の座は定まりぬ(p92)

身障度異なる四人が眼を手足を補ひ合ひて淡々と棲む(p117)

六畳に二名の議決も崩れゆくになほたのむ雑音なき私生活(p118)

真実をさぐる思ひに舌当つる基本天気の金板の冷え(p93)

点文字にたどる園歌の今鮮し一つの歌詞にながく躊躇く(p94)

苦しみてかち得し個室三.七五畳を贅沢となほも批判する声(p159)

4首目の「さぐる」、5首目の「たどる」という動詞によって表現されるのは、舌で点字を読み取るときの身体的・精神的な感覚。目で読み取ると、一文字一文字触れながら読むのとでは、受け取る意味もおのずと変わるだろう。「金板の冷え」には、痛みにも似た感触がある。

ハンセン病の治療が効果を発揮したてからは、視力や外見を回復するための治療にも積極的に取り組んでいた。

眉植うれば如何なる顔ぞ手鏡のなかをのぞきて吾は思案す(p86)

口唇の整形手術受けむ今日汗ばみて光明園の医局に着きぬ(p113)

世に復るのぞみはあらね眉植ゑてわが残年をきよらかにせむ(p86)

手術せし眼によみがへる縁にて草各々のかたちあるさま(p73)

吾が視力失われみし間に病状の落ちつきし顔かまじまじと対ふ(p100)

4首目、「草各々のかたちあるさま」に胸を打たれる。視力の衰えていたころには、世界は輪郭を失い、緑は一樣の面であった。そうだ。草はそれぞれのかたちをもっていたのだ。丸かったり、ぎざぎざ

していたり、細かったり。そのどれもが世界の真実を訴えかけているようだ。

後遺症は残るもの、依田のハンセン病は完治する。ずっと望んでいたはずのその時を、依田は若干の戸惑いとともに淡々と受け止めたようだ。次の3首が「愛生」に掲載されたのは1971年2月号であり、依田はその年の11月に脳出血のため59歳で他界した。

治療薬服まずともよき診断に心をどらぬ齡となりたり(p213)

菌無しと言はれし今に何惑ふ残る命の覚束なしも(p123)

癩癒ゆるをただこひ希ひて生きたりし四十年のいまあはあはき (p220)

当時の依田には後遺症のほかには深刻な健康上の懸念はなく、本人にとっても周囲にとっても唐突に訪れた最期だった。自らと共に老いてゆく園で送る残りの人生のことを思う日々であったようだ。次の4首は全て、日本中が大阪万博に沸き、園外に働きに出る軽症の入所者もいる一方で、新規入所者は減り療養所の高齢化が進行する将来が見えてきた1970年4月、依田が亡くなる前年の「愛生」に発表された歌である。

軽症舎は過疎不自由舎は過密となり古りし療園に皆老いてゆく(p199)

万国博の工事より戻り来し君の休らふ如く患者作業に出づ(愛生 1970.4)

島脱けて日稼ぎに出づる少数を弱き吾達のただ傍観す(愛生 1970.4)

七十年代流動のさま癩園の変貌のさま生きてなほ見む(p200)

園の内と外それぞれに、それぞれの仕方で時間が流れた。患者の生き方や社会との関わり方にも変化があったのだろう。生きて、変化を見続けること。4首目「生きてなほ見む」の意志は、観測者としての意志そのものだったかもしれない。

#### 政治活動について

依田は寡黙ではあったが、教育があり実直な人柄のためか人望はあったようで、戦後は自治会の役員を務めた。また園内の待遇改善などの政治運動で中

心的な役割を果たし、社会党員としても活動した。政治運動を題材にした歌には自らの強い信念を表現した歌もあるが、教育や気象・天文観測についての情感ある短歌と比べても、運動自身を冷めた目で見つめたものが多い。

法だけでは立派になるなどと思はねど屈辱的癩予防法は改正すべし(p106)

議場中継意識してする発言に吾はかなくなに口を噤みみつ(p137)

医師充員を叫べる壇へ鳴る拍手切実なり安保反対よりも (P104)

今年また実らぬと知る要求を抱へて昏し梅雨の明け暮れ (P106)

派閥憎む糾弾の声にも意図ありて彼自らの偏執さらす(p153)

静かなる決意語りて去りし君に好感を持ち名刺見直す(p154)

蜂起せし彼の日とどむる血判状自治のゆるみの火に失ひぬ (P242)

## 自然を詠む

依田は気象と天文以外にも自然への関心が高く、気象観測に加えて鳥や昆虫の初見日、植物の開花日など、島内の動植物の観察記録も残していた。歌人としては、アララギに所属し、斎藤茂吉や土屋文明の選を受けた依田の写生の力は島の自然を描くときに最も鮮やかとなり、瀬戸内の四季が見せる風景の細部を描いている。

白梅の花の梢に触る雪ほどろほどろに零となりぬ (p79)

雲切れし一瞬月は青ぎりて泡立つ入り江も照らし出しぬ(p82)

衰えゆくその目でも、身の回りの風景を写生し続けた。

おぼろなる路の日向に截石の雲母が光る目を刺すごとく (p57)

見ゆる眼をわづかに保ちこの萩のわた芽をつづる春光に会ふ (p166)

焼かれつつ魚の目白く濁りゆくあはれを今は知りそめにけり (p163)

見えること、それは光を感じることである。そんな当たり前のこと、雲母やわた芽に反射する光を通じて改めて知る驚きや喜びが「刺す」や「会ふ」といった動詞で表現されている。3首目は、焼かれる魚と自分自身とを重ね合わせる悲痛が、じりじりとした時間の中に凝縮されているようだ。

最後に依田の真骨頂ともいえる歌を取り上げる。

自記気圧線銳く墜ちぬ刻々の台風來を告ぐる夜更けに(p82)

自記気圧線とは、気圧の時間変化を自動的に測定する自記気圧計から出力されたグラフの線のことである。嵐前夜の緊迫した様子が「銳く」「墜ちぬ」「刻々の」と硬く緊張感のある言葉を重ねることで表現されている。この歌において依田は、自然を自らの身体が生まれながらにもつ五感で感じ取っているのではなく、観測装置が示すデータから読み取っている。訓練された科学者にとって、慣れ親しんだ観測装置がもたらすデータは「単なる数字の羅列」ではなく、自らを取り囲む世界についての身体的な感覚を与えてくれるものもある。依田は気象観測のデータから、遠方にある嵐の存在とそれが刻一刻と迫ってくる緊迫感を感じ取っているのだ。その意味でこの歌は、科学者・横内武男と歌人・依田照彦が見事に融合した歌であるといえるだろう。

## 5. おわりに

依田は1949年に愛生誌上で「短歌の表現に就いて」という講演録を発表しており、そこからどのように科学と作歌の活動に向き合っていたのか、その通底した信念を伺うことができる（依田1949）。

我々は狭い環境の中にあって変化に乏しい日々を送っている。然しひたむきに作歌しようとする意欲があれば今日の一日は昨日の一日とは異なるのである。感情の起伏があり生命の流動がある。私は仕事として毎日気象を観測しているが、天気の晴曇、雲のたたずまい、風の吹き方、寒暖の変化等一日として同じ条件の日はないのである（中略）短歌の世界に於ても同じことである。（中略）平凡なるものに非凡を見いだすこと、無意義なものに意義を附与すること

と、これが念々写生を実行するものによってのみ成就せられる短歌の境地である。

観測作業に当たる虚心な姿勢は、アララギの志向する写生にぴったりと寄り添うものであった。単純に科学者であることと歌人であることをイコールで結ぶことはできないが、観測を通じての発見と、風景を見つめる「吾」との邂逅は相通ずるものがあっただろう。

依田はまた、同講演の中で「病者意識を昂揚する前に先ず人間としての誠実な態度をもって作歌しなければならない」とも述べている。他の代表的な病床詠短歌である癌や結核のように差し迫る死に対峙する悲嘆とは異なり、依田がその後半生を生きた時代のハンセン病は長い人生をかけ、病が完治した後も向き合わなければならない病であった。依田は1948年の時点でそのことに自覺的であり、戦前の代表的なハンセン病文学学者である北條民雄や明石海人の文学が「深淵に向つて落下する流星の火花」であったのに対し、「是からの我々の文學は深淵から滾々と湧き出づる泉でなければならない」と講演録に書いている。依田にとってその中で歌うべきものは一瞬の命の輝きや歎喫するような悲嘆ではなく、淡々と紡がれる「今日」の連続の中に宿るただ一度きりの生であり、客観的に記し続ける営みそのものであった。

長島愛生園の入所者による集団的実践について研究した有菌によれば、入所者たちが結成した楽団「あおいとり楽団」の奏者たちは、「『ハンセン病』というカテゴリを特化させるのではなく、かといってそれを押さえ込み無化してしまうのでもなく、作品の完成度を追求するなかでおのずとにじみでる一つのテーマとして、あるいは、みずからを創作へと駆り立てる原動力として、それを把握していた」（有菌 2017:）。歌人・依田照彦にとってのハンセン病者であることもまた同じ意味を持っていたように思われる。一方、有菌はハンセン病者たちによる「自らに強いられたきわめて否定的な生存条件を肯定的なものへと転じて」ゆくための営為の、他者と協働した集団的実践としての側面が強調されている（有菌 2017:）。愛生園の気象観測所と天文台もまた、依田だけでなく複数の入所者が参加した集団的実践であり、職員や外部の支援者も関わるものであった。しかし「人間を相手としない仕事、自然の中に没入出来る仕事、雲の流れや風の動きに

意義を見出せる仕事」としての気象・天文観測を選んだ依田にとっては、不条理に満ちた人間社会の外側に拡がる世界を見てくれる自然こそが、その生を肯定的なものにしていたのではないだろうか。そして依田にとっての短歌は、人間社会と自然界という自らが生きている二つの世界をつなぐものであった。

依田照彦さんの思い出を教えて下さった長島愛生園の元気象観測所員である森田峯夫さん、現自治会長の中尾伸治さん、そして調査にご協力頂いた同園学芸員の田村朋久さん、木下浩さん、岡山大学の松岡弘之さんに感謝します。本稿は著者の磯部、鈴木が2016年に京都大学で開催していた依田照彦歌集の読書会に端を発しています。読書会に参加していた高橋卓也さん、佐々木勇輔さん、夫津木廣大さんにも謝意を表します。文献の収集においては小田島晴也さんにご協力いただきました。本研究は科学研究費補助金23K00258の支援を受けています。

#### 引用文献

- 青山陽子, 2014, 『病の共同体 ハンセン病療養所における患者文化の生成と変容』新曜社.
- 荒井英子, 1996, 『ハンセン病とキリスト教』岩波書店.
- 荒井裕樹, 2011, 『隔離の文学 ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス.
- 蘭由岐子, 2004, 『「病いの経験」を聞き取る—ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社.
- 有菌真代, 2008, 「国立ハンセン病療養所における仲間集団の諸実践」『社会学評論』 59(2): 331-348.
- 有菌真代, 2017, 『ハンセン病療養所を生きる—隔離壁を砕く』世界思想社.
- 池田学・渡邊幸男・牛山素行, 2000, 「解説シリーズ「水文・水資源観測最前線」気象庁における地域気象観測(1) AMeDAS の展開まで」『水文・水資源学会誌』13(4): 313-319.
- 磯部洋明, 2019, 『宇宙を生きる-世界を把握しようもがく営み』小学館.
- \_\_\_\_\_, 2015, 『宇宙環境とスピリチュアリティ』 鎌田東二『スピリチュアリティと環境』ビング・ネット・プレス.
- \_\_\_\_\_, 2022, 『ハンセン病療養所・長島愛生園における天文観測』, Stars and Galaxies, 5: id. 1

- 伊藤正保, 1963, 「らい患者の神経痛と気象の関係に関する横内武男君の業績の紹介」『長島紀要』 11: 46-49.
- 宇内一文, 2006, 「近代日本のハンセン病療養所における教育機関の研究」 日本大学教育学会『教育学雑誌』 41: 15-30.
- 内田守人編著, 1970, 『三つの門: ハンセン氏病短歌の世紀 : 全国ハンセン氏病者合同歌集』 人間的社.
- 大岡信, 大谷藤郎, 加賀乙彦, 鶴見俊輔編 2002, 「ハンセン病文学全集 1 小説一」 皓星社.
- 大岡信, 大谷藤郎, 加賀乙彦, 鶴見俊輔編 2006, 「ハンセン病文学全集 8 短歌」 皓星社.
- 大野ロベルト, 2020, 「アウトサイダー・アーティストとしての北條民雄 : 〈異端化〉のまなざし」『日本社会事業大学研究紀要』 66: 31-45.
- 小笠原慶彰, 2010, 「ハンセン病隔離主義批判と社会福祉研究の動向—服部正による小笠原登再評価をめぐって」『京都光華女子大学研究紀要』 48: 83-104.
- 小川正子, 1938, 『小島の春』 長崎書店.
- 加賀田一, 2010, 『いつの日にか帰らん ハンセン病から日本を見る』 文芸社.
- 神谷美恵子, 2004, 『生きがいについて』 みすず書房.
- 儀同政一, 2010, 「国際保健機関 (WHO) とわが国の多剤併用療法 (MDT)」『国立ハンセン病資料館研究紀要』 1: 66-68.
- 木村哲也, 2022, 「戦後ハンセン病療養所の短歌活動 : 合同歌集『陸の中の島』を中心に」『国立ハンセン病資料館研究紀要』 9:1-15
- 金貴粉, 2019, 『在日朝鮮人とハンセン病』 クレイン.
- 桑畠洋一郎, 2013, 『ハンセン病者の生活実践に関する研究』 風間書房.
- ———, 2025, 「ハンセン病問題における「家族」』『山口大學文學會志』 75: 1-18.
- 国立療養所邑久光明園人権擁護委員会, 2022, 『邑久光明園における病理解剖の検証報告書』
- 小松裕, 2007, 「ハンセン病患者の性と生殖に関する言説の研究」 『文学部論叢』 93: 23-41.
- 近藤宏一, 2010, 『闇を光に——ハンセン病を生きて』 みすず書房.
- 財団法人日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する研究会議, 2005, 『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』
- 坂田勝彦, 2012, 『ハンセン病者の生活史—隔離経験を生きるということ』 青弓社.
- ———, 2023, 「ハンセン病療養所入所者の運動は何とどう闘ったか—1950年代から60年代における「全患協」運動の展開から一』 『保健医療社会学論集』, 34(1): 3-11.
- 沢井実, 2008, 「戦間期における海軍技術研究所の活動」『大阪大学経済学』 58(1), 1-16.
- 澤野雅樹, 1994, 『癪者の生—文明開化の条件としての』 青弓社.
- 山陽新聞社編, 2017, 『語り継ぐハンセン病—瀬戸内3園から』 山陽新聞社.
- 鈴木陽子, 2020, 『「病者」になることとやめること——米軍統治下沖縄におけるハンセン病療養所をめぐる人々』 ナカニシヤ出版.
- 高木智子, 2017, 『増補新版 隔離の記憶: ハンセン病といのちと希望と』 彩流社.
- 立花明彦, 2008, 「長島愛生園におけるハンセン病視覚障害者と点字習得」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』 22: 67-74.
- 田中真美, 2016, 「ハンセン病の薬の変遷の歴史: 1960年代の長島愛生園の難治らいの問題を中心として」『コア・エシックス』 12: 183-196.
- 千葉修, 1972, 「依田照彦を悲しむ」 愛生 1972.3: 11-13.
- 戸引理, 2024, 「日本におけるハンセン病隔離政策長期化の要因」 政策研究大学院大学 博士論文
- 富田良雄, 2012, 「山本天文台モノ資料紹介』『第3回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録』京大天文台アーカイブプロジェクト, 28-88.
- 長島愛生園気象観測所, 1955, 『長島気象十五年報』 国立療養所長島愛生園.
- 長島愛生園教育部編, 1931, 『望ヶ丘の子供たち』 山雅房
- 長島愛生園入園者自治会編, 1982, 『隔絶の里程—長島愛生園入園者五十年史』 日本文教出版.
- ———, 1998, 『曙の潮風: 長島愛生園入園者自治会史』 日本文教出版岡山.
- 廣川和花, 2011, 『近代日本のハンセン病問題と地域社会』 大阪大学出版会.
- ———, 2023, 「「隔離」と「療養」の間で—コロナの時代に考える近代日本のハンセン病史—』『保健医療社会学論集』 33(2): 17-25.
- 平井雄一郎, 2012, 「宮川量と桜井方策, 二つの〔日本癪病史〕:[現場]の〔当事者〕によるハンセン病史叙述を考える」『国立ハンセン病資料館研究紀要』 3:31-45.
- 藤野豊, 1993, 『日本ファシズムと医療: ハンセン病をめぐる実証的研究』 岩波書店.
- ———, 2000, 『強制された健康: 日本ファシズム下の生命と身体』 吉川弘文館.

- 松岡秀明, 2015a, 「ハンセン病と短歌: 映画『小島の春』をめぐって」 *Communication-Design*, 12: 39-52.
- ———, 2015b, 「ハンセン病患者のライフヒストリーとしての短歌: 明石海人の歌集『白描』について」 *Communication-Design*, 13: 49-56.
- ———, 2016, 「ハンセン病短歌の形成: 内田守の熱情をめぐって」 *Communication-Design*, 14: 67-82.
- ———, 2019, 「二つのコンタクト・ゾーン: 終戦までのハンセン病療養所における短歌をめぐって」 『成城大学共通教育論集』 11: 109-121.
- 松岡弘之, 2020, 『ハンセン病療養所と自治の歴史』 みすず書房.
- 光田健輔, 1934, 「天変地異に際して」 愛生 1934. 10.
- ———, [1916] 2002, 「保健衛生調査会委員光田健輔沖縄県岡山県及台灣出張復命書」, 近現代日本ハンセン病問題資料集成(編集復刻版 戰前編第2巻), 不二出版, 74-96.
- 宮川量, 1936, 「鎌倉時代に於ける癩救濟者忍性律師の研究」 『レプラ』 7(2): 325-353\_8.
- ———, 1977, 『飛驥に生まれて—宮川量遺稿集』, 名和千嘉.
- 宮崎かづゑ, 2012, 『長い道』 みすず書房.
- 村井紀 ed., 2012, 『明石海人歌集』 岩波文庫.
- 森修一・阿戸学・石井則久, 2019, 「国立ハンセン病療養所における入退所動向に関する研究—1909年から2010年の入退所者数調査から—」 『日本ハンセン病学会雑誌』 88(2): 53-75.
- 森田峯夫, 1979, 「気象観測四十年の道程—区内観測所の任を終えて—」 愛生 1979. 8: 35-38.
- ———, 2010, 「気象観測四十年の道程—区内観測所の任を終えて—」 愛生 2010. 11\_12: 32-34.
- 山川基・小笠原眞・牟田泰斗, 2009, 「日本のハンセン病強制隔離政策と光田健輔」 『就実論叢』 39: 145-168.
- 横内武男, 1958, 「地方だより 長島観測所」 『天気』 5(10)
- 依田照彦, 1948, 「短歌の表現に就て」 愛生 1949. 2: 22-24.
- ———, 1954, 「流離の島」 短歌研究, 11(12).
- ———, 1956, 「長島天文台と太陽観測」 愛生 1956. 7: 53-65.
- ———, 1958, 「蜂蜜とピッケル」 愛生 1958. 11: 42-45.
- ———, 1972, 『依田照彦歌集』 長島短歌会.
- Burns, Susan L., 2004, Making Illness into Identity: Writing "Leprosy Literature" in Modern Japan, *Nichibunken Japan review* : Journal of the International Research Center for Japanese Studies, 16: 191-211.
- ———, 2019, *Kingdom of the Sick: A History of Leprosy and Japan*, University of Hawaii Press
- Butlin, Cynthia Ruth et al., 2020, Why we should stop using the word leprosy, *The Lancet Infectious Diseases*, 20(8): 900-901.
- Deps, Patrícia and Cruz, Alice, 2020, Why we should stop using the word leprosy, *The Lancet Infectious Diseases*, 20(4): e75-e78.
- Koba, Ai, Ishii, Norihisa, Mori, Shuichi and Fine, Paul EM, 2009, The decline of leprosy in Japan: patterns and trends 1964-2008, *Leprosy review*, 80(4): 432-440.
- Monot, Marc, Honore, Nadie, Garnier, Thierry et al. 2005, On the Origin of Leprosy, *Science*, 308(5724): 1040-1042
- Tanaka, K. M., 2013, Contested Histories and Happiness: Leprosy literature in Japan, Health, Culture and Society, 5(1), 99-118.
- Tanaka, Kyathryn, M. 2015, "Life's First Night" and the Treatment of Hansen's Disease in Japan: A Translation and Introduction to Hōjō Tamio's Novella, *Asia-Pacific Journal*, 13(4), 1